

辰野  
隆

旧友の死



旧  
友  
の  
死



## 志田文雄

去月二十七日の朝六時頃、僕は夢を見た。広い原にぼんやりたたず佇んでいると、向うから一群の中学生が四列縦隊で元気よく進んで来る、先頭に立って何か旗のようなものを捧げているのが、紛う方なき旧友志田文雄なのだ。稍やや反り身になって、白い布を肩から斜に懸けていた。彼の歩調は如何にも活潑だったが、近づいて来るに従って、

その衰え果てた蒼白の顔色に、僕ははっと驚いて、叫んだ。「文雄さん、そんなに歩いていいのか。」文雄さんは何とも答えずに、僕の目の前をぐんぐん歩いてゆく……そこで目が覚めた。

数日前からこの旧友の軽からぬ病がしきりに気にかかっていたので、「厭な夢だ」と不図独語した。折から夜具をたたんでいた妻が「どんな夢」と訊ねた。僕は只「文雄さんの夢だ」とばかり、多く語らずに起きてしまった。その日、午後三時頃、帰宅すると、妻が玄関に待ちうけて、今、研究室から電話がかかって大阪からの電報で、

志田さんが今朝九時半に亡くなられたと云うので驚いているところだ、と。僕は朝の夢の始終を妻に語った。

志田文雄は我が国電気工学の泰斗故志田林三郎博士の嗣子で、父君と専攻を同じくした。日本電気の専務取締役として、最近、北支視察の帰途、悪性の肺炎に侵され、大阪府の甲南病院で加養の甲斐もなく、日支共栄の大望を抱きつつ寿に先って逝いたのである。彼と僕とは府立一中の五年間、学業を怠る競争をして、互にスポーツに精進した。二人の交友ではその期間の印象が特に深かつ

たので、彼の最後の朝に、当年の思い出が僕の夢裡に悲しく甦ったのであろう。

## 誄

志田君今や我等旧友に先じて逝く、茲ここに此岸の別離を深く悲しむと雖いへども、はた彼岸の再会を期する望みを捨つる能はず、知己は互に生死の隔てを撤して時に談笑し痛飲せずんば已まざらんとす。



したたるよ若葉の雫酒かとも

昭和十三年五月三日

友田恭助（一）

新劇壇一方の重鎮友田恭助君が、伴田工兵伍長として上海に戦死した。友田君との交りは未だ数年にすぎぬが、僕は彼に対して終始清い感情を以て対することが出来た

のを嬉しく思っている。もし彼が死なずに生きて還ったら、今後も永い交友を続け得たろうと思う、それほど彼には人の信頼に値する飾らぬ純良さが自ら備っていた。

彼は何となく淋しい人だった。僕は今迄度々彼の舞台を眺め、舞台以外の彼に接する度毎に、その顔を視ながら、その声を聴きながら、時に、「この人は短命ではなからうか」と打消しつつ考えたことがあった。彼のひととなり為人にも芸風にも地味で浪漫的な暗さが離れなかつたのである。それが彼の持味であった。

最近の戦いに於いても、彼は飽くまで持味を發揮して  
いるように思える。最も難くして地味な工兵の作業に決  
死隊として加わり、歩兵部隊を渡らせるために幾度かク  
リークを往復してその大任を果した瞬間、敵弾に殪たおれた  
のであった。「運命の命ずる道に刻苦して任務を果し、  
黙して死ね」というアルフレッド・ド・ヴィニイの詩句  
は我が友田君にぴったり当てはまっている。

彼が一粒種英司君の写真をひしと胸に抱きしめながら  
戦っているという新聞記事を読んで、さもありませんと思

う間もなく、翌日の記事では、更に彼の肅然として壮烈な戦歿が伝えられた。記事を読む眼が幾度か曇って、涙がとめどなく流れるのを押し拭いつつ、僕はもはや帰らぬ友を沁々と悼んだ。彼の余栄の永く秋子夫人と英司君の上に絶えざらんことを。

## 友田恭助（二二）

赤羽の学士会ゴルフ場の堤から眺めると、時々、放水

路の水上を、工兵隊の兵士が勇ましい掛声をかけながら、組立舢はしけの櫓ろを押している光景を見かけることがある。その激しい練習はこの前の上海事変以来、工兵隊でも、特に力を入れてしているように思われた。

先日、久しぶりにゴルフ場を訪れて、三番コースに立って、左側の川面を眺めると、向う岸に近いところを、数名の工兵を乗せた組立舢が流れを溯さかのぼっていた。艦ともに立った一人が力かぎりに櫓を押していた。僕はその姿を睨じっと眺めているうちに涙が出て来た。それは、去る十六日の読売新聞所載、真柄・藤沢両記者の決死的な撮影に

かかる、友田恭助君の戦死直前の勇姿——一つは浮袋を肩から胸に懸けて塹壕に暫し休やすらうている凜然たる肖像と、他の一つは呉淞ウースンクリイクを背景として、豆のよう小さく映っている彼の戦鬪ぶりと——をまざまざと想い出したからであつた。クリイクの写真では、友田君がぐつと取舵を引いて舳を敵の岸边に著けようとしている。他の四名の兵士は背を丸くして舷に手をかけ、脚は既に岸に降りているらしい。唯、友田君だけが未だ艫に踏張つて、櫓を握りしめているので、敵の目標になりやすい位置に居る。彼の周囲には敵弾がしぶきを散らしている

のを、此岸で息もつかずに見守っている真柄・藤沢両君の胸中は察するにあまりある。漸く対岸にしがみ付いた友田君に、両君が「オオイしっかりしろ」と声を涸らしながら叫んだ時、友田君は横なぐりの雨のようにそそぐ弾の中で、手を挙げて合図したという。死に直面して奮闘しながら、何たる余裕だろう。あの温厚な友田君が舞台度胸を末期まで、報国の丹心を以て塗り上げたと思うと、「偉いぞ、友田！」と心の底から叫ばずにはいられない。而も、手を挙げて合図した彼の胸のポケットには、幼い英司君の写真が収められていたのだと思うと、再たして

も、涙を誘われるのである。

目を上げると、放水路の舳は依然として勢よく溯つてゆく。櫓を押す兵士が疲れると、他の兵士が交替して力漕を続けつつ、やがて僕の視界から遠ざかって行つた。

友田君もゴルフが好きだったが……。霞の春に、狭霧の秋に、鷹の台のリンクスで、両三度手合せをした楽しい思い出も、その人既に逝いて、今や寂寞たる別離の悲しみが一しお身に沁みる。



時雨るるや主なきクラブ錆びにけり

(昭和十二年十月)



日本文学電子図書館

---

## 旧友の死

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館